会話の含意解釈パタンと推論過程の認知モデル

― Grice と Morgan の理論に基づく分析から

新　妻　明　子

1．はじめに

私たちは普段のコミュニケーションにおいて、絶えず「相手は何を伝えようとしているのだろう。」と頭の中で考えながら聞き手としての役割を担っている。この聞き手の頭の中で起こっていることこそが「推論」であり、Grice（1975）の研究に端を発する「推論型」と名付けられているモデルによって表される原理によってコミュニケーションを成立させている。このモデルは、次の図式で示されるように、話し手が出した情報（発話）から聞き手がどのような過程を経て意味を判断するかというモデルである。

［1］　推論モデル

思考	発話（記号）	推論⇒理解
話し手		聞き手
著者		読者

（内田・前田（2007）：187）

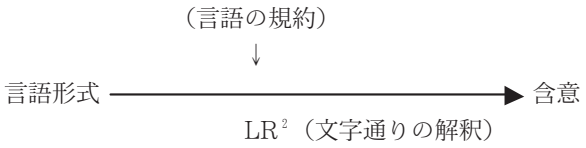
内田・前田（2007）も、「聞き手が常に表面的な言語（構文）から話し手の意図を読み取る際には、さまざまな候補の中から最適な解釈をした場合にのみ円滑なコミュニケーションが成立する」と述べているように、言語として表面に現れていない部分についてどのように最適な解釈を行っているかについてのメカニズムが、コミュニケーションを円滑にするための重要な役割を担っていると思われる。ここで述べられている「話し手の意図」が「会話の含意」であると捉え、その解釈のメカニズムを解明していくための道具立てとなるのが Grice（1975）の理論である。Grice はその中で、格律の無視と協調の原理の相互作用が含意解釈の引き金になることを明らかにした。そして、Morgan（1978）は、解釈を行う際のコンテクスト化の推論過程には言語の規約と使用の規約という 2 種類の規約が関与し、含意短絡という作用が生じる場合もあると論じている。この 2 つの理論を組み込むという提案をした内田・前田（2007）を基に、含意の解釈のメカニズムについて考察する。

2．内田・前田（2007）と含意解釈パタンモデルと Grice における問題点

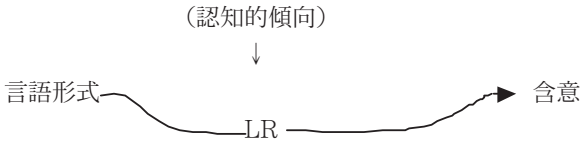
内田・前田（2007）は Morgan（1978）の「含意短絡」という理論を Grice（1975）のモデルに組み込むことにより、次のような含意解釈のパタンを想定した。

[2]　含意の解釈パタン

（A）CI[1]（言語規約的含意）

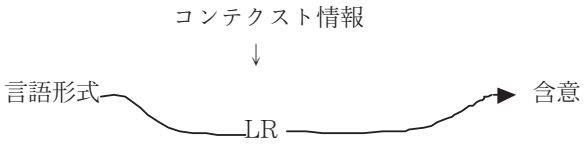


（B）GCI[3]（一般化された会話の含意）

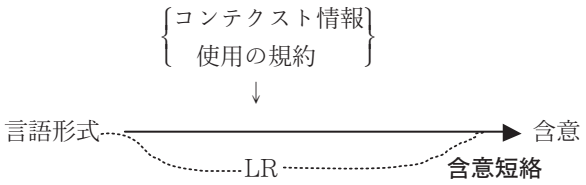


（C）PCI[4]（特殊化された会話の含意）

a. 即時的



b. 慣習的



（内田・前田（2007：167-168））

また、このモデルについて以下のように説明している。

（A）のパタン（CI）では含意はLRやコンテクストと無関係に生ずるので、含意解釈は言語の規約（コード）を通じてなされる。（B）と（C）のパタンはLRが解釈の課程で参照されるという点で（A）と異なる。GCIは類像性など人間認知の働きに根ざした含意で、LRさえ提示されれば、コンテクストと無関係に生ずる。そして（C）[a]と（C）[b]はそれぞれ、即時的なPCIと慣習的なPCIに対応する。（C）[a]の解釈パタンは状況依存度が高く、LRの解釈の上で重要な働きを担っているが、（C）[b]では使用の規約が全

[1]CI＝conventional implicature
[2]LR＝literal reading
[3]GCI＝generalized conversational implicature
[4]PCI＝particular conversational implicature

面に出される。このため（C)[b] の解釈パタンは状況依存度が低く、LR の参考程度の働きしかない（内田・前田（2007)：168)。

次に、Grice の問題点として、西山（2004）が指摘することを 2 点採り上げる。

第一に、「Grice にとって語用論の役割は真理条件的意味論をいたずらに複雑化しないために考え出された補助装置でしかなく、そこには、語用論が人間の認知能力に対する心的モデルであるという視点が欠如していた。」と述べている点である。そして、2 点目は、「Grice が格律で説明しようとしたことは『推意』(implicature）と呼ばれる暗黙のうちの含意に限られるものであったが、語用論上の推論は推意のみならず、『表意』(explicature）と呼ばれている『発話によって明示的に言われている内容』の把握レベルでも働くのであり、Grice は表意の把握についても語用論的推論が働くという点を看過ごしていた」という指摘である（西山（2004)：94)。

内田・前田（2007）の提案したモデル（図[2]）に西山（2004）の指摘した問題点を照らし合わせると、次のようなことがいえる。

まず 1 つ目は、図[2] のモデルから、会話における含意は、発話という言語形式から文字通りの解釈（LR）を何らかの形で経由した結果解釈されることがわかる。しかしながら内田・前田（2007）も述べている「特有の感情的効果が伴う」という点、つまり、格律を故意に無視することによって生じるレトリカルな効果が含意と共に解釈される点が表されていない。西山（2004）が指摘した第一の問題点にあるように、「語用論が人間の認知能力に対する心的モデル」である以上、含意と共にそれに伴う心的側面も同時に解釈されるため、会話のレトリックとしての効果が表れるはずである。

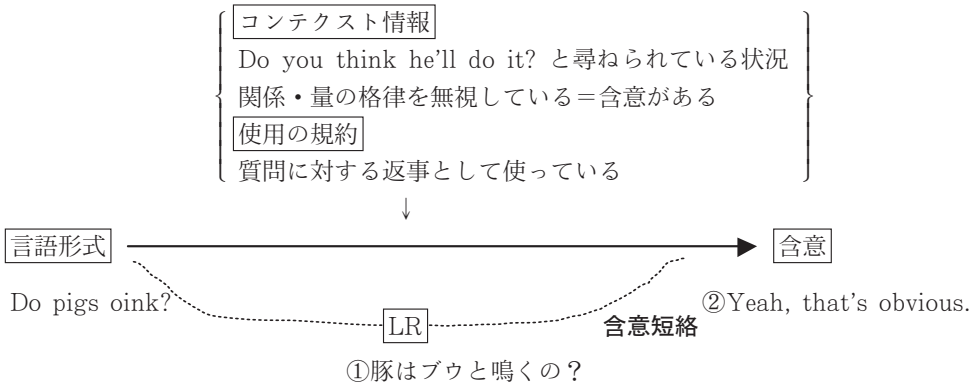
2 つ目は、このモデル(B)・(C)では、会話の含意における LR から含意に至る動機付けが説明されていない。LR は単なる通過点として扱われているが、LR における推論が含意と同時に特有の感情的効果を伝えるのではないかと考えられる。内田・前田（2007）で「特殊化された会話の含意」(PCI）として採り上げられた具体例を見てみよう。

(1) A: Do you think he'll do it?
B: Do pigs oink?
（A: 彼はそうすると思う？
B: もちろん。）

（内田・前田（2007：142))

ここで採り上げられた “Do pigs oink?” は、図[2] のモデルでは（C)[b] に当てはまると結論づけられているので、モデルに当てはめてみると図[3] のようになる。

[3]　Do pigs oink? の含意解釈パタン



前述のように、このモデルだけでは、なぜ LR の「豚はブウと鳴くの？」（図[3] ①）がコンテクスト情報や使用の規約の影響を受けながら含意の Yeah, that's obvious（図[3] ②）と解釈されるのかについての動機付けが明らかではない。なぜ含意のような意味になるのか聞き手の推論過程が説明されていないのである。西山（2004）が第 2 の問題点で指摘しているように、「発話によって明示的に言われている内容」の把握についても語用論的推論が働くということは、図[3] のモデルに置き換えれば、LR「豚はブウとなくの？」は単なる通過地点ではなく、この LR の把握から含意に至るまでの過程に語用論的推論が働き、それによって含意のみならず、「そんな質問はばかげている」といった侮蔑の心情をも伝えることになるということができるといえる。

以上のことから、これら 2 つの問題点についての修正案を示すことを試みる。さらに図[1] のモデルは次のような階層性を成していると考えられる。

(2)　(A) ＞ (B) ＞ (C)[b] ＞ (C)[a]

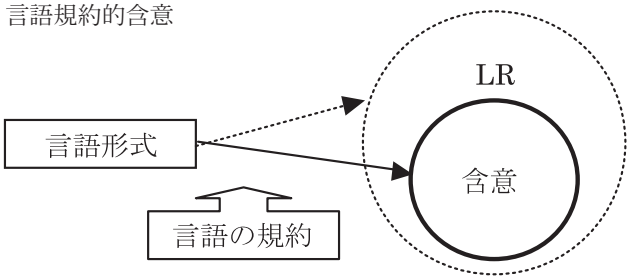
修正案で示したモデルと共に、この階層性についても検討していくことにする。

3．含意の解釈パタン修正モデルの提案

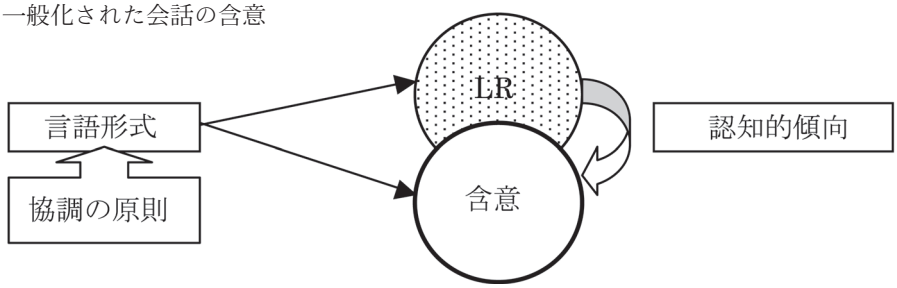
前節で述べたように、含意のような意味になる推論過程とその過程における LR と含意との関連性に関しても、含意の解釈パタンモデルに組み込む必要があり、4 つのパタンはそれぞれ独立しているのではなく、階層性を成していると考えられる。そのことをふまえて、4 つの含意の解釈パタン―（A)言語規約的含意(CI)、(B)一般化された会話の含意(GCI)、(C)特殊化された会話の含意(PCI)の慣習的なパタン、(D)特殊化された会話の含意(PCI)の即時的なパタン―の修正モデルを提案する。なお、次のモデルについて、それぞれの図全体で発話全体の解釈を表すものとする。

[4]

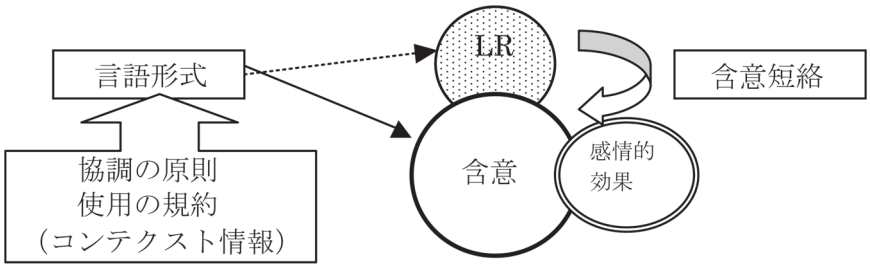
(A) 言語規約的含意



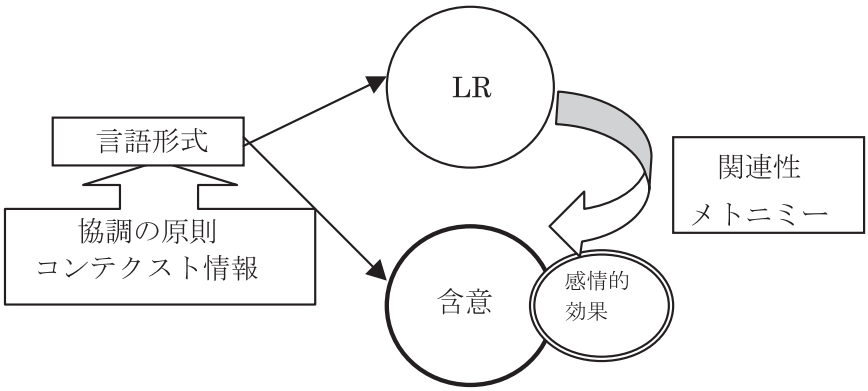
(B) 一般化された会話の含意



(C) 特殊化された会話の含意―慣習的パタン



(D) 特殊化された会話の含意―即時的パタン



次に、(A)から(D)のそれぞれの解釈モデルについて、モデルが示す内容をモデルごとに説明する。

3．1　言語規約的含意の解釈モデル（A）

まず、(A)についての例を見てみよう。次例の各(a)は各(b)を示唆する。

(3)　a.　It's Christmas Eve *but* the shops are empty.
　　b.　The two states of affairs described in (a) are contrasted in some way.
(4)　a.　He is an Englishman; he is, *therefore*, brave.
　　b.　His being brave is a consequence of his being an Englishman.

（西山（2004）：32）

(a)が(b)を含意している動機づけとなるのは but や therefore などの「言語の規約」である。このケースはこれらの言語的にコード化されている意味に依拠しているので、Grice は(3)と(4)の各(b)を各(a)の言語規約的含意[5]（conventional implicature）と呼んだのである（西山（2004）：33)。実際に解釈される場合においては、「文字通りの解釈（LR)」の中に、言語の規約によって決定される LR とは別の推論が成り立つことになる。この図[1](A)では、あくまでも LR を含意によって説明できるという意味で、含意を LR の内部に含むものとした。その結果、LR と含意が一体化したような図となり、第 2 節で述べたように、「発話によって明示的に言われている内容」についても推論が働かなければ含意を解釈することができないことを表している。特に(3)や(4)のような例については、含意生成の要因が「言語の規約」としか示されていないため、なぜ含意が生じるのかについての説明に関しては、Grice の分析よりも Sperber & Wilson（1995［1986］）や Blakemore（1992）の「手続き的意味」(procedual meaning）による分析の方が適しているように思われる。この分析は、「言語表現の意味が世界の状況記述ではなく、計算のための情報を記号化したもの」（荒木（1999）のことであり、Blakemore は so や after all, however, moreover などのような表現の分析の基底にある考えであるとしている(Blakemore（1992 : 207))。

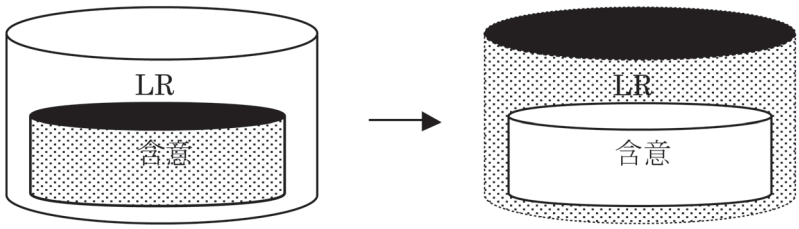
また、内田・前田（2007）は、Grice が言語規約的含意を会話の含意と並行的に扱ったことに対する疑問として、次のように指摘している。

(5) CI が含意の慣習化から生まれたとすれば、助動詞や接続詞などいわゆる文法語（grammatical word）の「意味」はすべて CI であると言えなくもない。なぜなら、文法語は歴史的に見るとどれもかつては語彙項目（lexical item）であったものが、文法化（grammaticalization）の過程の中で現在の位置づけを獲得したからである（Hopper and traugott（1993)、Heine et al.（1991）など)。そして文法語はその過程で本来の語彙的意味を失い、かつての含意であったものがいつしかその言語形式の新しい「意味」と なったのである。(内田・前田（2007)：159)

この通時的な観点からの指摘について、図[5] のように表した。

[5]西山（2004）では「規約的推意」という用語を使用しているが、前田（2007）の用語を採用した。

[5] a.　　b.



例文(4)の therefore は古英語の terfore ‘for that’「そのために」に由来し、「それゆえに」はその含意であった（寺澤（1997：1425））（図[5a]）。それが現在では therefore 自体が「それゆえに」という意味を獲得した（図[5b]）。このような現象は「語用論的強化（pragmatic strengthening）とも呼ばれ、「ある表現をある状況の下で実際に使用する際の話者の解釈が、いつのまにか次第にその語の意味に取り込まれてしまうこと」をいう（河上（2005：184））。つまり、図[5b] の状態となった「それゆえに」という意味はもはや含意ではなく、それ自体が言語の規約となり、LR としての役割を担うことになるのである。このようなプロセスにおいて、本来の含意が徐々に前景化されてきたといえるであろう。

Grice（1989）の言語規約的含意に対する説明は、基本的に but, therefore, even, yet, so などの語の意味を概念的（conceptual）にとらえるアプローチであり、概念的意味が情報の「what の側面」を表示するのに対して、前に述べたように、Blakemore（1992）の「手続き的意味」は、その表示された意味をいかに操作するかという、情報の「how の側面」に関わるということが指摘されている（西山（2004））。

以上のことから、言語規約的含意によって伝えられる含意は、語の百科事典的な意味の側面を持っており、その解釈において聞き手の推論が機能するといえる。

3．2　非言語規約的含意モデル（B）・（C）・（D）

次に、図[4](B)・(C)・(D)は非言語規約的含意（non-conventional implicature）という１つのカテゴリーとして捉えることができる。これらの含意はコンテクストを視野に入れた含意であり、話し手と聞き手の間に(6)のような条件が整う場合成立する（Grice（1975））。

(6) a.「協調の原則」（cooperative principle）または「格律」（maxim）を守っていると仮定できる。[6]
　b. 話し手が P を言ったという事実と、(6a)の仮定とを両立させるために、話し手の意識の中には含意する内容 Q が存在する。
　c. 話し手は、(6b)の仮定を必要とするということを、聞き手が推論するだろうと予測する。

「協調の原則」が働いているかどうかという点が図[4](A)との大きな相違であるといえる。さらに、図[4](B)はコンテクストとは無関係に生ずるという点が、図[4](C)・(D)との相違点である。

[6]内田・前田（2007）を一部変更して使用。

3．2．1 一般化された会話の含意（GCI）の解釈モデル（B）

まず、一般化された会話の含意（GCI）の解釈モデル（B）に当てはまる具体例を見てみたい。次の例は、文献でよく引き合いに出される有名な例である（内田・前田（2007））。

(7) a. The road was icy. She slipped. (Traugott and König (1991:193))
b. 女性が凍結した道路で足を滑らせた。

(7a)の2つの文の間には因果関係が生まれるため、(7b)のような解釈が生じる。文の順序が事象の時系列的認識を反映しているために因果関係があると解釈され、この仕組みを内田・前田（2007）は、「類像性」(iconisity）であるとしている。「類像性」とは、認識の構造を言語に反映させようとする言語の普遍的傾向であり、そのため、図[4](B)において矢印内で表されているLRから含意を生成する要因は「認知的傾向」であると示した。そして、図中のLRの部分が含意の部分に比べて暗く表示されているのは、聞き手が(7a)を聞いた時点での解釈は、But in fact she slipped on a banana peel. などと取り消されない限りは、(7b)の含意が主として解釈されることを表したためである。次の(8)のような会話はおそらく自然に聞こえると思われる。

(8) A: The road was icy. She slipped.
B: Oh, is she OK? You'd better put on sneakers.

(8B)の発話の前提には(7b)の解釈があるために、「彼女みたいに凍った道路で滑らないようにスニーカーを履いたほうがいい」といえるのであって、(7b)の解釈がない(9)のような会話は明らかに不自然であるといえる。

(9) A: The road was icy. She slipped. But in fact she slipped on a banana peel.
B: #Oh, is she OK? You'd better put on sneakers.

(9A)は不自然な文ではないことと、(9B)は(8B)と比較して不自然さが増すこととから、(7a)の解釈のプロセスとして、「類像性」という認知的傾向から因果関係が生じることによって(7b)の含意が生成され、(7b)の含意の方がLRより際立って解釈されるといえる。そして、それを反映させたものが図[4](B)となる。つまり、「一般化された会話の解釈モデル」(図[4](B)）では、LRから含意を生じさせる動機付けとなるのは類像性などの認知的作用であり、コンテクストとは無関係に含意が生じ、聞き手にとっては含意の方が際立って解釈されることになるのである。

3．2．2 特殊化された会話の含意（PCI）―慣習的パタンの解釈モデル（C）

まず、内田・前田（2007）で議論された具体例を見てみよう。

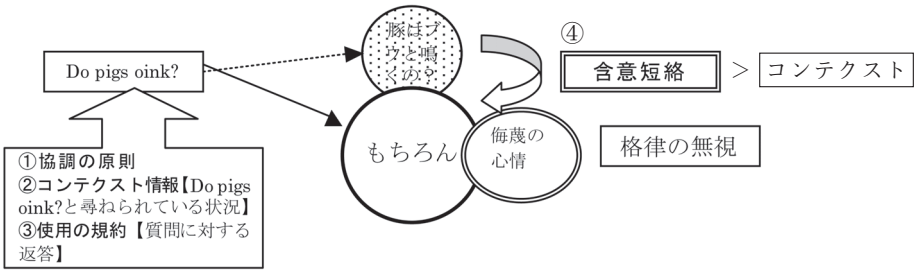
(10) A: Do you think he'll do it?
B: Do pigs oink?

（A: 彼はそうすると思う？
B: もちろん。）

（内田・前田（2007：142））

内田・前田（2007）の意義は、Morgan の理論を Grice のモデルに組み込んだことであった。そのため、Do pigs oink? の LR「豚はブウと鳴くの？」が含意「もちろん。」を生成する過程において Morgan のいう「含意短絡」（short-circuited implicature）が作用すると考えた。そのため、(10)のようなコンテクストにおいて(10B)の含意を「豚はブウと鳴くの？」と解釈する母語話者は皆無に近いことになる。そして、Do pigs oink? は Yeah, that's obvious を含意するだけでなく、同時に「そんな質問はばかげている」という侮蔑の心情をも伝えている（内田・前田(2007：147)）。具体的に(10B)を図で説明すると次のようになる。

[6]



上の図[6] で言語形式である Do pigs oink? の下に作用している①協調の原則、②コンテクスト情報、③使用の規約は、あるコンテクストにおける発話であることを示す。しかし、ここで使用の規約が影響を与え、含意短絡が生じるため、コンテクストへの依存度は低いことになり、LR「豚はブウと鳴くの？」から含意を解釈する過程に作用するのは含意短絡による部分が大きいということを示している（図[6]④）。3.2.3で解説する図[4](D)との相違点のひとつがここにある。そして、解釈される内容としては含意と感情効果の部分のみが解釈され、LR「豚はブウと鳴くの？」そのものは解釈されない。しかし、この LR が格律を無視しているからこそ侮蔑の心情という感情効果が顕在化するのであり、そういう意味で LR の部分は暗く表示してあり、含意の背後に存在するような形となっている。

また、LR「豚はブウと鳴くの？」がなぜ含意「もちろん。」と解釈されるのかという動機付けに関しては「含意短絡」としてしか示されていないが、この部分について詳しく述べたい。まず、LR から含意を生成する過程は以下のように説明できる。

①「(10B) は (10A) に対する返答である」というコンテクストにおいて、格律を遵守した場合、Yes, I do あるいは No, I don't という表現を聞き手は期待する。
②聞き手の期待に反して (10B) Do pigs oink?という返答がくる。これは格律を無視しているため含意があることを理解する。同時に話者 B は何らかの心情も表していることを解釈する。
③②によって含意を推測する。Do pigs oink? への回答は Yes となることから、話者

の発話は Yes という意味であると解釈する。

④②③によって、Do pigs oink? の答えが Yes であることは誰にとっても当たり前の答えであることから、「そんなことは当たり前だ。わかりきっている。」という感情が含まれていることを解釈する。

この流れを簡単に表すと次のようになる。

(11) 聞き手が LR から含意を導く過程

①Yes/No が返ってこない（含意がある）

↓

②Do pigs oink?の答は Yes

↓

③①＋②より、答えは Yes!

↓

④Do pigs oink? の答えが Yes であるのは誰に聞いても当然＝話者は「当然だ」という感情を表現した

そして、Morgan（1978 : 274-75）は「含意短絡」を次のように定義している。

(12) 含意短絡とは特定の発話パタンが特定のコンテクストのもとで頻繁に使用された結果、推論過程にルーティーン化が生ずること。

つまり、(11)のようなパタンが頻繁に使用されることによって、LR が伝えられると同時に(11)①から(11)④以外の推論過程は生じることがなくなり、自動的に含意解釈が成り立ち、含意解釈の過程が短絡化するのである。Morgan は、このように特定のコンテクストのもとで特定の目的のために使用するという発話パタンの慣習化のことを「使用の規約」(convention of use）と呼んだが、この「使用の規約」が働くためにコンテクストへの依存度は低くなり、聞き手には含意と感情的効果のみが解釈され、LR はその感情的効果を前面に出すための手段でしかなくなるのである。

さらに、なぜ(11)のような推論過程がルーティーン化し、含意短絡を引き起こすことができるのかについて考えてみたい。

第一に、Do pigs oink? という返答は「関係の格律」を無視している。この「関係の格律」に注目したのが Sperber & Wilson（1995）であり、「関連性を求める認知能力」によってコンテクストに合致した解釈が成されると分析した。「関連性を求める認知能力」については次のように定義している。

(13) 関連性の認知原則（Cognitive Principle of Relevance）
人間の認知は、関連性の最大化と連動するように働く傾向がある。

(14) 関連性の伝達原則（Communicative Principle of Relevance）
すべての意図明示的伝達行為は、それ自体の最適な関連性の見込みを伝達する。

（Sperber & Wilson（1995 : 260）（吉村訳））[7]

この定義(14)に基づいて、話者はDo pigs oink? と発話し、聞き手は協調の原則によって、話者が(14)を行っていると確信しているため、(13)によってコンテクストに基づいてLRから推論し、含意を解釈しようとする。言い換えると、(13)によってLRとコンテクスト情報に関連性を見出すことによって、話者の意図を解釈するのである。そして、(11)①から(11)③の推論過程を辿ることになるのである。これらの原則が成り立っていると仮定すると、結果的にどのような話者にも同じ推論過程が成り立つといえるため、(11)の推論過程はルーティーン化することが可能となるのである。

第二に、このモデルにおける含意短絡を、メトニミー（換喩）による転義と分析し、それによってこの推論過程がルーティーン化すると考える。谷口（2003）によると、メトニミーとは、伝統的に「近接性に基づく比喩」と定義されてきた。この「近接性」が「因果関係」や「時間的な前後関係」なども表すことから、菅井（2003）では、次の例文の間接発話行為はメトニミーとして分析することが妥当であるとしている。

(15) a. この部屋寒いね。→　窓を閉めて下さい／暖房を入れて下さい。
〈因果関係に基づく転義〉
b. はい、ありがとうございました。→　そろそろやめてください。
〈時間的な前後関係に基づく転義〉

（菅井(2003)：176）

このように分析すると、Do pigs oink? とYesの間にも〈問題と正解〉というメトニミーの解釈が成り立ち、(16)のような間接発話行為であるということができる。

(16) 豚はブウと鳴くでしょ？　→　当然です。

また、私たちは、幼い子どもへの発話でない限り、「豚はブウと鳴くの？」という意味でわざわざDo pigs oink?と尋ねるような場面はあまり思い浮かばない。次の例を見てみよう。

(17) Will Lizzie become a pop superstar? Will she be able to deceive her tyrannical future high school principal Ms. Ungermeyer? Is the sky blue? *Do pigs oink?* Is Homer Simpson *that* lazy, bald, and fat?
（インターネットサイトに掲載されたThe Lizzie McGuire MovieのReviewより）
(18) Is the game fun? Is it worth a purchase? *Do pigs oink?* Anyone with a Gamecube owes it to themselves to pick up this game.
（インターネットサイトに掲載されたゲームソフトEternal DarknessのReviewより）

これらの例にも表れているように、Do pigs oink? は質問をたたみかけるような文章のス

[7] 日本語訳は吉村あき子氏の訳（東森・吉村（2003））を借用させていただいた。

タイルに合わせる形式で使用されている一種のレトリックである。Morgan による「使用の規約」とはいわばレトリックの慣習化であり、メトニミーもレトリックの一種と考えてよいだろう。野内（2000）はメトニミーの効果として、経済性・表現性・婉曲性の3つを提示しているが、上の例におけるような使用はまさにこれらの効果を発揮しているといえる。そして、発話におけるレトリカルな効果が感情的な効果であるといえる。このようなメトニミーによる分析によって、この推論過程のルーティーン化が可能になるのである。

「関連性を求める認知能力」と「メトニミー」とのどちらの作用が含意短絡の動機付けとして決定的になるのかは明らかにはできないが、これらの働きによって、特殊化された会話の含意の中の慣習的なパタンに当てはまる表現が頻繁に使用され、推論過程にルーティーン化を生じさせる要因となっていると考えられる。

3．2．3 特殊化された会話の含意（PCI）―即時的パタンの解釈モデル（D）

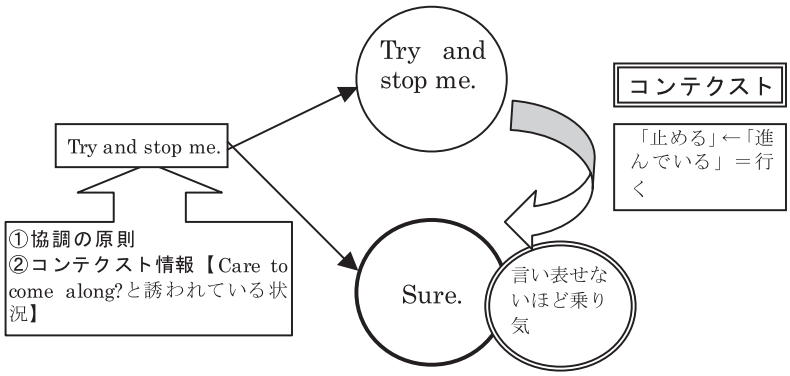
内田・前田（2007）は含意短絡の生じない上にコンテクストへの依存度が高いパタンとして、特殊化された会話の含意（PCI）の中の即時的なものとして、図[2](C)-a を提案した。その修正モデルが図[4](D)である。これに当てはまる例を見てみたい。

(19) A: A friend of mine invited me to visit her school. Care to come along?
B: Try and stop me.
（A: 友達が学校に招待してくれたの。あなたもいっしょに行かない？
B: ええ、もちろん。）

（内田・前田（2007：129））

この例文(19)をモデルに当てはめたものが下の図[7] である。

[7]



ここでの解釈過程を次に述べる。

(20) ①「(19B) Try and stop me が(19A) Care to come along? に対する返答としての発話である」というコンテクスト情報に基づいて、話者 B が格律を遵守した場合、話者 A は OK/Sorry などの返答を期待する。

②話者 A の期待に反して(19B) Try and stop me という返答（LR）がくる。これは関係と量の格律を無視しているため含意があることを理解する。同時に話者 B は何らかの心情も表していることを解釈する。

③②によって含意を推測する。「私（の気持ち）を止めてみなさいよ。」という LR からも話者 B の伝えたいことは解釈できるが、②があるために、LR と含意との関連性を推測し、無視された関係と量の格律を補おうとする。「止めて」ということは「進んでいる」つまり「行く」ということであり、含意は「行く」ということを解釈する。

④②と③によって、「止めてみなさい」と言う程「進んでいる」、つまり「乗り気である」という感情的効果を解釈する。

(C)の慣習的パタンと異なる点は、コンテクストに依存して LR と含意の間をつなぐ関連性を推論し、発話を解釈する点と、LR も発話で伝えられていることを解釈するのに重要な情報を担うという点である。後者について(C)との違いを次のように示す。

(21)（C）慣習的パタン
A: Do you think he'll do it?
B: #Yes. Do pigs oink?

(22)（D）即時的パタン
A: A friend of mine invited me to visit her school. Care to come along?
B: Sure. Try and stop me.

LR の果たす役割が異なることから特殊化された会話の含意（PCI）は慣習的パタン(C)と即時的パタン(D)に分類されることになる。

そして、図[4](D)や図[7] で表示された LR から含意への矢印は、3．2．2 で述べた「関連性を求める認知能力」や「メトニミー」によって連結されていることを示している。発話を解釈する行為において、LR から含意を生成する動機付けが含意のパタンによって変わるということはあり得ないことであり、内田・前田（2007）も、これらの含意解釈パタンをコンテクストにおける発話理解の動的側面に注目して提案している。発話理解が動的側面をもつということは、つまり、「関連性を求める認知能力」や「メトニミー」によって連結されている矢印の部分がルーティーン化されることによって使用の規約が生じるようになり、縮小してくることを意味する。つまり、図[4](D)や図[7] の LR と含意の距離が近くなってくるのである。その距離が縮まる現象とコンテクストへの依存度は反比例しているといえる。図における LR と含意の間が完全に消えることが「含意短絡」であり、それゆえ、隣接性を表すメトニミーとも解釈できる上に、さらに、語用論的強化という現象に影響を与える要因になると考えられる。

4．4つのモデルの階層性

第 3 節で論じた 4 つのモデルは次のような階層性を成していると考えられる。

[8]

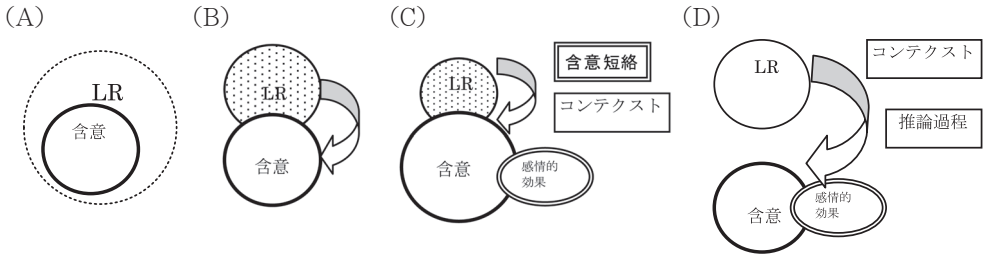
（A）＞（B）＞（C）＞（D）

大 ←――――――――――――――― 小

取り消しなどの制約・解釈における LR の影響度

解釈の固定化の度合い

[9]



さらに、発話における言語表現は(D)から(A)へと移行する可能性があり、そういう意味でそれぞれの発話表現がどれに分類されるかは流動的になりうる。そして、逆の方向への移行はないといえる。図[9](D)のように、聞き手によって解釈されるものは、LR と LR からの推論過程による含意とそれに付随する感情的効果であるが、図[9](C)では推論過程は含意短絡という作用に変化し、図[8](B)ではコンテクストや格律を無視する必要がなくなり、LR から自動的に含意が生成されることになる。つまり、発話における解釈として成り立っていたものが、言語の規約として成り立つように(D)から(A)へと変化するのである。具体例を見てみよう。

内田・前田（2007）で採り上げられたイディオム “kick the bucket” は典型的なイディオムとして例にあげられることが多い。現在なぜ「くたばる」という意味になったのかについては諸説があるが、OED によると次のように記されている。

(23) The beam on which a pig is suspended after he has been slaughtered is called in Norfolk, even in the present day, a ‘bucket’. Since he is suspended by his heels, the phrase to ‘kick the bucket’ came to signify to die.
（初出1597, *Mod. Newspaper.*）

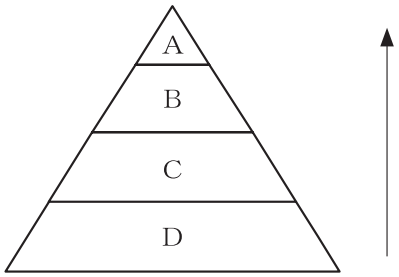
初めは豚が梁に吊るされているのを見て「くたばる」という意味で使われたのを段階(D)と解釈することができ、その後、首にロープをかけて桶を蹴飛ばすという絞首刑の手順とも共通することからコンテクストによる制約が薄れ、頻繁に使われるようになったために含意短絡が生じ、段階(C)に移行していったと考えられる。次に、含意の定着化が進んだために、コンテクストに依存しなくても「くたばる」という意味に解釈できるようになったのが段階(B)であるといえる。定着化ということについて補足すると、早瀬（2002）によると、トークン頻度[8]が言語体系にも影響を与え、何らかの効果を引き起こすとされている。この場合

[8] トークン頻度に関しては、心理学的にも高頻度であればあるほど活性化の程度も高いので記憶に残りやすいし、アクセスしやすくなることが確かめられている。（早瀬（2002））

は、「保守化効果（Conserving Effect）」と分析することができる。保守化効果とは、「トークン頻度が高いと表現の認知上の処理が一つのユニットとして自動化されるため、表現の内部に特異な形や性質が含まれていてもそれを保守的な形で（過去に忠実に）維持する傾向にある」ことである（早瀬（2002））。(23)で定義されている bucket の意味は一般的にはほとんど使用されていないにもかかわらず、kick the bucket というイディオムとして定着している現象は、このような効果が影響しているものと思われる。このように、kick the bucket 全体で「くたばる」という意味を表すようになったのが段階(A)であるといえる。ここではもはや「バケツを蹴る」という LR は消え、もともと含意であった「くたばる」が kick the bucket の意味として表面に出ている状態である。

このように考えると、発話の解釈は(D)→(C)→(B)→(A)という段階を経ていくということがいえるのではないだろうか。一度次の段階に移行してしまったものは逆行することはないため、これらの解釈モデルは階層構造を成しているといってよい（図[10]）。

[10] 含意の解釈における階層性構造



A: 言語規約的含意

B: 一般化された会話の含意

C: 特殊化された会話の含意―慣習的パタン

D: 特殊化された会話の含意―即時的パタン

このような階層が移行していく現象を語用論的強化と結びつけることができ、図[9] においても含意が徐々に LR に取り込まれていく状態が示されている。そして、会話における含意において段階を移行させる要因となっているのが、含意短絡やトークン頻度であるといえるであろう。

5．まとめ

本研究では、Morgan の理論を Grice のモデルに組み込んだ内田・前田（2007）の提案する含意解釈モデルの修正案を示した。それと同時に、ここで LR として論じてきた Grice の「発話によって明示的に言われている内容」の把握に関して、語用論的推論が働いているということと、なぜ LR から含意が生成されるのかについての動機付けとその過程を、修正モデルを使って説明を試みた。LR から含意が生成する動機付けについては、Sperber & Wilson（1995）が主張する「関連性を求める認知能力」と、「メトニミー」の作用が関係しており、Morgan の提案した含意短絡もこのような力が作用し、トークン頻度による効果が影響を及ぼし、語用論的強化と呼ばれる現象を引き起こす要因にもなっているという可能性を示唆した。そして、それらの影響度によって、4 つのタイプに分類された含意が一連の階層的構造を成しうることを提案した。

ここでは深く触れなかったが、Sperber & Wilson の関連性理論は、LR から含意を生成

する過程における解釈の成立に関連性が作用することに焦点を当てた理論であり、ここにあげられたGriceの問題を克服し、発展させた理論であるということが言える。今後は関連性理論における「表意」と「推意」の捉え方と、推論過程におけるメカニズムとその要因についてさらに詳しく解明していく必要があるだろう。

【参考文献】

荒木一雄編（1999）『英語学用語辞典』東京：三省堂

Blakemore, Diane (1992) Understanding *Utterances: An introduction to pragmatics*: Basil Blackwell.　武内道子・山﨑英一（訳）（1994）『ひとは発話をどう理解するか－関連性理論入門－』東京：ひつじ書房

Grice, P. H. (1975) "Logic and Conversation," in P. Cole and J. L. Morgan (eds.), 41-58 *Studies in the Way of the Words*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

東森　勲・吉村あき子（2003）『関連性理論の新展開（英語モノグラフシリーズ21）』東京：研究社

野内良三（2000）『レトリックと認識』東京：日本放送出版協会

西山佑司（2004）「語用論と認知科学」大津由紀雄、波多野誼余夫（編）『認知科学への招待―心の研究のおもしろさに迫る―』（第7章）東京：研究社

Sperber, D. and D. Wilson.（1995［1986］）*Relevance: Communication and Cognition*.（2nd ed.）Oxford: Blackwell. 内田聖二他（訳）（1999）『関連性理論』（第２版）東京：研究社

菅井三実（2003）「概念形成と比喩的思考」辻幸夫（編）『認知言語学への招待』シリーズ認知言語学入門第1巻　127-182 東京：大修館書店

谷口一美（2003）『認知意味論の新展開―メタファーとメトニミー（英語学モノグラフシリーズ20）』東京：研究社

Traugott and König（1991）"The Semantics-pragmatics of Grammaticalization Revisited," in E. C. Traugott and B. Heine (eds.), *Approaches to Grammaticalization*, Volume I. Amsterdam: John Benjamins. 189-218.

内田　恵・前田　満（2007）『語用論―英語学入門講座・第11巻』東京：英潮社

DVD VERDICT DVD Reviews 'The Lizzie McGuire Movie'
http://www.dvdverdict.com/reviews/lizziemcguire.php　2010/09/30

Price grabber Video games Nintendo Eternal Darkness: Sanity's Requiem for Nintndo GameCube User Rivews 'Eternal Darkness'
http://reviews.pricegrabber.com/gamecube-games/m/580239/　2010/09/30